特定非営利活動法人
宮入慶之助記念館

宮入慶之助記念館だより

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
2018（平成30）年　8月8日発行
第26号

宮入源太郎前理事長（前館長）追悼号

宮入源太郎館長の死を悼む

多田　功（宮入慶之助記念館前名誉館長・九州大学名誉教授）

宮入源太郎館長のご尊父宮入耕一郎氏と私の出会いは1990年頃であった。私は宮入慶之助先生生誕の地を訪ねるべく篠ノ井に宮入家を訪問したのである。耕一郎氏はその前年に九大医学部を訪れ私の師である宮崎先生に会われ、医学図書館の宮入文庫や宮入通りを見学され感銘を受けられたという。耕一郎氏の宮入記念館設立構想開始は私が九大に移ってからで、設立を目指し準備のため長男源太郎氏と建三氏らが何度も訪ねてこられた。九州大学から資料提供などサポートを開始した。1999年に長野市で記念館設立記念会が開かれ、慶之助ご親族の方々や「死の貝」の著者である小林照幸氏ら多くの方々が参加された。耕一郎氏ご逝去の後は源太郎氏が館長を継がれた。2005年には石井　明理事（自治医科大学名誉教授）と二人で館長を扶け、九州大学出版会から「住血吸虫症と宮入慶之助」を出版した。2013年秋には九大医学部で住血吸虫感染経路発見100年記念展を開催した。期間中に氏と奥様、斎藤直実ご夫妻を福岡に迎えて、我が家で会食を楽しんだこともあった。2015年4月18日に九州大学医学部寄生虫学同門会は宮入源太郎氏に第20回宮崎一郎奨励賞を差し上げた。テーマは「宮入慶之助先生の業績保存と社会への寄生虫病問題の提示」である。しかし源太郎館長とお会いしたのは2017年6月17日の記念館総会が最後となった。ご夫人を亡くされて間もなくご自身も癌に侵され治療を開始されたのである。今年の2月、突然ともいうべき訃報に私は大きなショックを受けた。信州人らしい剛直で篤実な同じ歳の親友源太郎さんの人生と考え方をもっとお聴きしておけばよかった、もっと一緒に酒を酌み交わしておけばよかったと後悔は今も尽きない。辛い思いで2018年6月17日に墓参を果たし、墓石に福岡の酒を注いで別れを告げた。ご冥福を祈るのみである。

▲宮崎一郎奨励賞授賞式にて（2015年4月）
（前列中央が宮入源太郎前館長）

宮入源太郎さんの思いを継ぐ

宮入慶之助記念館理事長　山口　明

私の以前の職場が長野市立博物館で源太郎さんが博物館友の会会員だったことから、友の会を通じて源太郎さんとは知り合いになりました。もう20年以上前のことと思います。友の会主催で「私のたからもの」展を開催した時に、源太郎さんは収集したトランジスタラジオや記念館の宮入慶之助資料を出品したことがありました。

▲記念館前で神明神社獅子舞を舞った後で（2017年9月）

その後、2015年6月の記念館通常総会、2016年6月の慶之助生誕150周年祝賀会に源太郎さんから来賓ということで出席を請われ、出席させていただきました。今思えば、こうした記念館の総会や記念祝賀会等を通じて記念館の活動のこと、宮入慶之助のことを少しでも私に伝えたいという思いがあったのではないかと思います。私が記念館会員になる前にも展示収蔵資料の保存や整理について相談を受けたりしていましたが、源太郎さんは直接口に出しては言いませんでしたが、直接記念館に関わってくれることを期待していたことが言外から伺えました。来賓という形で出席を要請したのもその一端だったのかもしれません。

源太郎さんは弟の建三さんの協力を得て、宮入慶之助の資料収集、常設展示の充実などに尽力し、次にこうした資料の保存整理を進めたいと意を強くしていました。そうした状況の中で私が博物館にいたこともあって協力を求めたのではないかと推測するところです。

2017年4月、私がたまたまフリーになり、源太郎さんの思いを察して記念館と関わるようになりました。6月の通常総会後に本格的に資料整理に取りかかりましたが、11月に源太郎さんが入院となり、その後病床にあったため、個々の資料に関しての情報を直接源太郎さんからお聞きすることができなかったことが何より残念なことでした。源太郎さんも伝えたいことがあったのではないかと思っています。

▲記念館通常総会後の懇親会にて（2017年6月）

2018年6月、記念館通常総会にて新理事長に私が選任されましたが、源太郎さんのこれまでの記念館に寄せる熱い思いを受け継いで形にし、記念館の行く末を見守ることが後を引き継ぐ者の責務だと思っております。

源太郎さん、これまでご苦労様でした。ご冥福をお祈り致します。

「資料をつくる」ことの意味

飯島　渉（青山学院大学文学部教授）

まず、宮入源太郎さんのご冥福を心よりお祈りいたします。10年ほど前のことになりますが、記念館をお訪ねして、宮入慶之助関係の貴重な資料を拝見しました。

残念なことに、日本では、こうした貴重な資料を収集・整理・保存し、関心を持つ方の利用をはかる制度が全く整っていません。その意味では、個人の努力によって、資料を収集・整理・保存してきた宮入さんの熱意に敬意を表する次第です。

医学史関係の文献や個人資料を含め、資料の整理と保存をアーカイビングと呼び、資料を保存して公開する機関をアーカイブと呼びます。諸外国では、こうしたアーカイブが充実しており、個人の資料も研究者が利用することが可能です。

残念なことに、日本ではアーカイブはきわめて貧弱であり、貴重な資料が廃棄されることが少なくありません。日本住血吸虫症の制圧をめぐる行政資料の多くも廃棄されています。こうした中で、宮入慶之助記念館の果たしてきた役割は小さくないと言えるでしょう。

医学史の領域においては、医学史博物館と医療系のアーカイブがぜひ必要です。こうした機関があれば、医学史を専攻する研究者だけではなく、病気にかかった患者・家族と医療関係者が、病気や健康に関する知見を広く共有することが可能になるからです。

資料は「つくる」ものです。資料を収集し、整理・保存して公開する営為こそが、資料を生み出すのです。こうした営為なくして、資料は生まれることはありません。

宮入源太郎さんの収集整理された貴重な資料が今後も保存・公開されていくことを願っています。また、歴史家として、何かお役に立つことがあれば、ぜひ協力させていただきたいと考えているところです。

宮入源太郎館長を偲んで

桐木　雅史（獨協医科大学熱帯病寄生虫病学講座）

私が初めて宮入源太郎様とお会いしたのは確か2011年の寄生虫学会大会の会場であったと思います。当時は、住血吸虫研究に携わる者として宮入慶之助記念館に興味を抱きながら、特に関りは持っていませんでした。会場で見慣れない、長身で物腰の柔らかい紳士を「どなただろう？」と思っていたところ、幸いご挨拶させていただく機会に恵まれました。私の様な若輩の者にも丁寧にご挨拶下さったことを印象深く覚えています。これを契機にNPO法人宮入慶之助記念館に入会させていただきました。

入会後、会員に送られてくる会報『宮入慶之助記念館だより』は住血吸虫症の話題だけに留まらず、様々な分野の方々の寄稿が掲載され、毎回楽しみに拝見させていただいております。

ある号に、記念館ホームページ訪問者からのメッセージが紹介されていました。その方は、かつて日本住血吸虫症有病地であった木更津市出身で、住血吸虫症罹患経験のあるご友人の体験談などが掲載されていました。この、木更津市を含

[Med. Entomol. Zool. Vol. 69 No. 1 p. 19–29 2018] 19

DOI: 10.7601/mez.69.19

千葉県小櫃川流域における日本住血吸虫中間宿主
ミヤイリガイの生息地の変遷

二瓶直子[*,11,12]　桐木雅史[1]　高岡博文[2]　郷口利夫[3]　斉藤康秀[4]
平　健介[5]　米島万有子[7]　望月貫一郎[8]　千種雄一[9]

[1] 国立感染症研究所疫学部（〒162-8640 東京都新宿区戸山1-23-1）
[2] 麻布大学獣医学部寄生虫学教室（〒252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺1-17-71）
[3] 獨協医科大学熱帯病寄生虫病学講座（〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林880）
[4] 国際内科病院（〒264-0032 千葉県千葉市花見川区小深田1-23-6）
[5] 千葉大学大学院医学研究院病院化器内科学（〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1）
[6] 東京医科歯科大学国際環境寄生虫病学（〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45）
[7] 熊本大学文学部（〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2-40-1）
[8] 株式会社パスコ パスコ総合研究所（〒153-0043 東京都目黒区東山2-8-10 目黒ビル別館3F）

（受稿：2017年12月3日；登載決定：2018年2月20日）

Changes in the habitat of *Oncomelania hupensis nosophora*, the intermediate host snail of *Schistosoma japonicum*, along the Obitsu River basin, Chiba Prefecture, Japan

Naoko NIHEI*[11,12], Masashi KIRIGUCHI[1], Hirobumi KOEN[2], Toshio TSUTSUGUCHI[3], Yasuhide SAITOH[4], Kensuke TAIRA[5], Mayuko YONEJIMA[7], Kan-ichiro MOCHIZUKI[8] and Yuichi CHIGUSA[9]

*Corresponding author: nihei@nih.go.jp
[1] *Department of Medical Entomology, National Institute of Infectious Diseases, 1-23-1 Toyama, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8640, Japan*
[2] *Laboratory of Parasitology, School of Veterinary Medicine, Azabu University, 1-17-71 Fuchinobe, Chuo-ku, Sagamihara, Kanagawa 252-5201, Japan*
[3] *Department of Tropical Medicine and Parasitology, Dokkyo Medical University, 880 Kitakobayashi, Mibu-machi, Shimotsuga-gun, Tochigi 321-0293, Japan*
[4] *Kion Internal Medicine Clinic, 3-23-6 Mihonwadai, Wakaba-ku, Chiba, Chiba 264-0032, Japan*
[5] *Department of Gastroenterology and Nephrology, Graduate School of Medicine, Chiba University, 1-8-1 Inohana, Chuo-ku, Chiba, Chiba 260-8670, Japan*
[6] *Department of Environmental Parasitology, Tokyo Medical and Dental University, 1-5-45 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8510, Japan*
[7] *Faculty of Letters, Kumamoto University, 2-40-1 Kurokami, Chuo-ku, Kumamoto, Kumamoto 860-8555, Japan*
[8] *PASCO Research Institute, PASCO CORP., 2-8-10 Higashiyama, Meguro-ku, Tokyo 153-0043, Japan*

(Received: 3 December 2017; Accepted: 20 February 2018)

Abstract: *Oncomelania hupensis nosophora* (Ohno) is the intermediate snail host of *Schistosoma japonicum* (Trematoda, Schistosomatidae) (S) in Japan. The last domestic schistosomiasis infection in Japan has been thought to occur in Yamanashi Prefecture in 1977. In 1983, the intermediate host snail was isolated from paddy fields along the Obitsu River basin in Chiba Prefecture, Japan. At that time, schistosomiasis was assumed to become a past disease in this area. Thus, activities to eliminate Ohno of annual screening programs of residents in this area had been conducted. Indeed, this disease represents a neglected endemic disease in Japan. This report describes the epidemiological history of the disease from various approaches including clinical information, philological study, interview surveys, snail collection surveys, and changes in land use and environments using geographic information systems. The assumption of disease elimination was based on the lack of reports of new infection for more than 30 years, environmental modifications, and almost no snail infestation from 2012 onward in known habitats. We concluded that continuous monitoring of the snails is not necessary in the studied area, while a certain level of attention to redistribution of the snail from hidden habitats may be required.

Key words: *Oncomelania hupensis nosophora*, *Schistosoma japonicum*, development of land use, geographic information systems, neglected tropical disease

▲二瓶先生のレポート

む小櫃川流域の住血吸虫症有病地は、有病地であることが判明した1980年代には既に新たな感染の危険はないと考えられる状況であったため研究者の目が向かず、他の国内有病地に比して極めて情報の乏しい状態にありました。この小櫃川流域の住血吸虫症有病地の消長をまとめるべく調査を進めていた国立感染症研究所の二瓶直子先生にこの記事のことをお伝えしたところ、二瓶先生は記念館にご仲介いただき旧住血吸虫症患者の方とコンタクトをとられ、大変貴重な情報を収集されました。『宮入慶之助記念館』に取り持っていただいたご縁だと思います。二瓶先生らが小櫃川流域の住血吸虫症についてまとめた論文は、学術雑誌『衛生動物』の第69巻19～29頁（2018年3月）に掲載されました。宮入館長のご存命中に間に合わなかったことが悔やまれます。

念願かなって私が宮入慶之助記念館をお尋ねしたのは2015年の夏でした。とても暑い日であったこと、宮入館長自ら案内して下さったことを鮮明に覚えています。宮入源太郎館長のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

寄生虫に感謝！　源太郎さんと出会えたのはムシの縁

小島　夫美子（九州大学大学院医学研究院保健学部門検査技術科学分野）

2012年2月にそれ以降の私の人生が大きく変わることになった多田功先生との運命的な出会いがありました。多田先生は折に触れて、寄生虫に関する研究、教育、活動のお話をされ、そしてたくさんの寄生虫関係者の方々を私に紹介してくださいました。そのお一人が宮入源太郎さんです。多田先生から宮入慶之助記念館設立の経緯や活動趣旨についてのお話を聞き、私もぜひ記念館と関わりを持ちたいという思いが募り、早速、館長でおられた源太郎さんに連絡を取りました。2012年4月23日が源太郎さんと私の（メールでの）出会いの日です。折しも翌年の2013年がミヤイリガイ発見から丁度100年の節目に当たるため、源太郎さんは記念館活動の一環として記念行事を行うことに意欲的に取り組まれました。その一つとして“日本住血吸虫中間宿主発見百周年記念展”と題した展示会を九州大学医学図書館で開催することを希望され、この企画の確認・視察の目的で2012年7月13日に博多に見えられ、初めて源太郎さんとお会いしました。これ以降、直接お会いできたのは10回ほどでしたが、短い時間の中でも源太郎さんの誠実なお人柄に心惹かれました。他方、源太郎さんは、市立博物館でのギャラリートークや記念館卓話会の講師という形で私が長野に来る機会を作ってくださいました。長野の街並が見渡せる居酒屋で、多田先生と源太郎さんご夫妻そして直実さんご夫妻と一緒に、長野の美味しい地酒に酔いしれながら楽しく過ごしたひと時は私の大切な思い出となりました。

▲博多にて（2012年7月）

▲福岡にて直実さんと一緒に（2015年4月）

源太郎さんと出会えたのは宮入慶之助記

念館がきっかけ、記念館と関わることができたのは多田先生のおかげ、多田先生と出会えたのは寄生虫が縁と考えれば、源太郎さんとの出会いは宮入慶之助博士が日本住血吸虫の中間宿主であるミヤイリガイを発見したことに端を発しているように思います。私は学生時代から今に至る約40年間を九州大学医学部キャンパスで過ごせたこと、そして寄生虫という学問、研究に関わることができたことにあらためて喜びを感じています。

もしも願いが叶うのであれば、もう一度源太郎さんと一緒にお酒を酌み交わしながらお話ししたかったなと思います。源太郎さんの宮入慶之助記念館へ込められた熱い思いが末永く後世に伝わることを願ってやみません。

「追憶」

宮入　聰一郎

源太郎氏とのいつもの面談時の思い出ですが、大きな身体から親しみのある声で“どうも、どうも”という最初の言葉が忘れ得ません。

数多い思い出の中で故人も後日に書き留めて貰いたいと思う話を記述します。それは、祖父慶之助がドイツ留学時の師リョフラー先生の伝記の真筆原稿が筆者の従兄、故村山定男氏（慶之助の長女かく子と夫村山達三〈駒込病院長〉の長男）の手許にあると以前より源太郎氏と自宅に訪問時に聞いていたのです。その後、なかなか入手に至りませんでした。ところが不幸にも村山定男氏が平成25年8月に亡くなられて後に、蔵書から遺品として見付かったのです。源太郎氏はリョフラー先生の伝記原稿を執念のように何とか手に入らないものかと、筆者と会う度に話をされていました。何せ慶之助の直筆だということのため入手を強く熱望されていましたが、なかば諦めかけてもいました。

▲九大構内にて（2013年11月）

村山定男氏は生涯独身のため、親戚である丹野廉三氏が喪主を務められ遺品の整理などすべて委任されており、その事実経緯が葬儀に参列した筆者が知るところとなり、源太郎氏熱望の原稿の所在がやっと判明しました。早速、源太郎氏に連絡し、丹野氏、筆者と3人で平成26年3月、東京新宿にて面談寄贈いただく事となりました（記念館だより第20号平成26年4月掲載）。

▲リョフラー先生の伝記原稿の受領時（2014年3月）

面談時の源太郎氏の興奮度合い、満面の笑み状況は相当なもので、面談後3人の記念撮影と共にその会話を収録しました。

ことほど左様に源太郎氏は新資料収集や情報を日頃から注意深く探索されるなどの言動より記念館に対する熱い思いが伝わり頭が下がる思い出の一つして特筆されるものと思います。多大なご尽力とご交誼いただきました事、感謝の念で一杯です。有難うございました。ここに、源太郎氏の御冥福をお祈り申し上げます。

宮入源太郎前理事長とミヤイリガイ発見100周年記念イベント

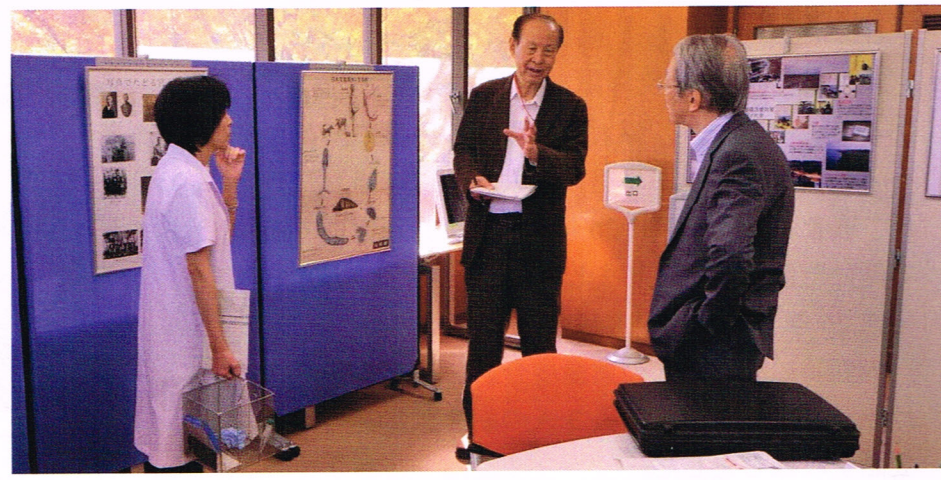
宮入　建三（弟）

2010（平成22）年、今から約8年前の早春、3人の兄姉が、久しぶりに顔を揃えたときのことでした。庭先に生えているフキノトウを採ったりしたあと、雑談が途切れた拍子に、源太郎前理事長から唐突に「ミヤイリガイ発見100周年記念企画イベントを、国立科学博物館で実施したい。」という意向が出された。一同、「え～！」という気持ちだった。既に100周年記念の企画は7件になっていた。ここへきて私たちとしては無謀とも云えるような企画を一つ加えるのは、無茶では無いか？　元国立科学博物館理工学研究部長の天文学者、村山定男氏（宮入慶之助の孫）を知っているというだけで、日本の理学系博物館の頂点といわれる施設が、当記念館の企画を信用してくれるか。様々な不安や危惧される困難を並べ立てて翻意を期待したが、前理事長は、困ったような表情を浮かべ口元に微笑みを覗かせたのみでした。

▲国立科学博物館の展示ポスター
（2013年5月～6月）

その後、前理事長の粘り強く精力的な交渉の末、目黒寄生虫館との共催で、―ミヤイリガイ発見100年記念企画展示―「日本はこうして日本住血吸虫症を克服した」と銘打った展示が2013年5月15日から一ヶ月間、国立科学博物館で開催されました。科学博物館のメインテーマは、「深海」というもので国家的とも思えるような巨大な企画でした。

当記念館の展示会場は、日本館の企画展示室の一室を使用した小規模なものでしたが、アンケートにあるように多くの反響が寄せられ注目されました。この企画が実現に至るまでには企画の意図するところをご理解・ご支援いただいた目黒寄生虫館や、山梨の住血吸虫症旧感染地域へ実際に足を運んで下調べをおこなっていただいた倉持利明国立科学博物館動物研究部長等のあたたかいご支援を抜きには考えられません。



▲九大の「日本住血吸虫中間宿主百周年記念展」会場にて（2013年11月）

「ミヤイリガイ発見100周年記念企画」は様々な場所でイベントをおこなった後、慶之助の研究生活の原点であった九州大学医学部医学図書館で締めくくりのイベントを実施し、終了しました。「100周年記念企画」を通して、前理事長は、慶之助の功績をなぞりながら、数々の課題を提起し奮闘していました。残された私たちは前理事長の描いた想いに近づく努力を、微力でも続けていきたいと願っています。

兄の思い出

板倉　キイ（妹）

弟建三が車を運転出来た頃には、年2～3回三人で集まって話し合い、運営もやっていた。やがて親族だけでは継続できなくなり、地元会員にお願いしようと、大勢の会員に入会して頂いた。来訪者の応対、経理、発送事務他、すべてやって頂ける体制が出来た。兄は、皆で集まって仕事したり、折々に1000円会費で飲むのが楽しいと、よく語っていた。思うに郷土の偉人といっても来訪者は先細りで、お忙しい中無償で協力下さっている会員の方々に、これ以上の負担をお願いするのは心苦しく、兄の死が閉館に向かう区切りになったのはまあ良かった。春近い冬の午後、兄の棺は地元会員の手で車に運ばれ火葬場へ向かった。ありがとうございました。

宮入源太郎君を偲ぶ

長澤　保

私は更級郡西寺尾小・中学校の同級生で男女合わせて43名のクラスでした。宮入君は、学業成績は上位グループに位置し、高校は進学校の長野北高等学校に入学、卒業後は上京し、電気通信大学に進学。その後、国際電気に勤務され、定年退職後はしばらくして西寺尾に単身で帰省された。

宮入慶之助記念館の初代館長が宮入君の父耕一郎さん、それを引き継いだのが源太郎君で、当時あまり知られていなかった曾祖父の慶之助博士について知名度を上げたい、市民に親しまれる施設にするために地元の識者、役員ら関係者に理解と協力を得る中で模索を始めておられた。見学者を増やすために地元の育成会や神楽保存会、子ども神輿に結集する親子への普及活動に努めた。

▲小中学校の同級会にて（2010年3月）

源太郎君は医者とは縁のない歩み、「無線ラジオ」に造詣が深く、趣味としてラジオの収集をされており、市内問御所町のトイーゴでも展示会を催された。何はともあれ、医学界の人脈がなかっただけに、記念館の名誉館長・九州大学名誉教授の多田功先生や東京医科歯科大学院教授太田伸生先生等の指導助言に勇気づけられていたと思う。

「宮入慶之助記念館だより」のこれまでの編集発行は、慶之助博士の遺伝子が能力として発揮され、並々ならぬ努力の産物でした。

2013年のミヤイリガイ発見100周年の東京医科歯科大学、国立科学博物館、九州大学医学部図書館、地元の長野市立博物館での各企画展に記念館も共催として参加し、源太郎君も開催に向けて奔走した。私も長野市立博物館での展示にはお手伝いをした。

源太郎君は、記念館の資料整理を思考する中で、新理事長となられた山口明氏に資料整理を託すことになり、源太郎君にとって運命的な出会いであったと思う。源太郎君のご冥福を祈ります。

宮入前館長さんの想い出

柳澤　紘

宮入家と私の生家とは、遡ってみると私が小学生になった昭和27年頃には当地に存在し、細い畦道で繋がっておりました。そんな訳で私が小学生の頃には、弟の建三さんに良く遊んで頂きました。

源太郎館長さん（以後源太郎さんと呼ばせて戴きます）が大学に進学されてからは、次第に交流がなくなり、私が高校を卒業し、就職により当地を離れたことで、宮入家の皆さんとの交流は次第に疎遠になって行きました。又、私が就職後実家に帰った折、母から御母堂のスワさんに何かとお世話になっている旨を聞かされた事を想い出します。

その後、私が長野に転勤となり、実家跡地に家を建て、当地区に住み始めましたが、宮入慶之助記念館については何の知識も無く、多くの歳月が過ぎてしまいました。そして、数年前に記念館の会員の誘いを受け、会員になり、現在に至っております。

▲長野市博の寄生虫展示
2013年7月～9月

源太郎さんとはそんな訳で、昔から存じ上げておりましたが、実際のところ数年間のお付き合いでしたが記念館について、色々勉強させて頂きました。信州大学医学部や長野市立博物館、厚生連篠ノ井総合病院など数々の場所でのパネル展示のお手伝いをする中で、宮入慶之助の偉業を多くの皆さんに知って頂こうと奮闘されていた源太郎さんの姿を想い出します。そんな折に、病魔に侵され、数度の入退院を繰り返しながら宮入慶之助記念館の館長としての職務をされておりました。病魔に侵されたことで、宮入慶之助記念館の今後について大変心配され、我々地元会員との話し合い、又、理事の先生方にも相談されたと伺いました。

ご家族や我々地元会員の願いも虚しく、病魔は容赦なく源太郎さんを蝕み、ついに源太郎さんの命を奪い、源太郎さんは帰らぬ人となりました。余りにも突然な源太郎さんの死に、地元会員は途方に暮れるばかりでした。地元会員と親族の話し合いの結果、源太郎さんが残した多くの功績を大切にしながら、当面継続して行く事に決定しました。今後は地元会員が結束し、宮入慶之助記念館の発展に寄与したいと思います。改めて前館長宮入源太郎様のご冥福をお祈り申し上げます。

宮入家の思い出

小山　信

昨年5月川中島町公民館で、宮入源太郎前館長講師による、ミヤイリガイの講演があったのですが、主催者側のある方があいさつで、みやいり彗星の話をされました。それで思い出したのが小学生の時、アポロ1号が月の周回に成功したのですが、テレビの解説者をスワさん（宮入前館長の母親）と従兄弟の人と母が言っていました。後日父が週刊誌で読んだそうなのですがその方は、大病を患い入院されていたのですが、天文学の第一人者という事で画面に写らない所で医者が血圧脈拍を計りながらの解説だったそうです。

▲白丸と白丸の間の小惑星 14902Miyairi

子ども頃から「みやいりさんちはがくしゃのうち」と聞かされていたのですが、容姿性格とも前館長はスワさんに似て控え目で話し好きの人でした。我が家に何回か来ていただき、パソコンを教えていただいのですが、よく使う言葉が「ぼくは」「かれは」で、都会が似合う人でもありました。

宮入源太郎さんの思い出

酒井　輝雄

私は、源太郎さんの弟錦次郎（故人）さんとは小中学校の同級生で、小学生の頃はよく六角形のお宅（記憶では）に遊びに行った仲でした。しかし、源太郎さんに会ってはいましたが、話した記憶が殆んど無く今日に至っています。

源太郎さんは、西寺尾和楽会の会計担当副会長として、活躍されておりました。怪我で体調を崩し入院されたため、会長から是非副会長をと頼まれ引き受けました。復帰された源太郎さんと 60 数年振りにお会いし、私は庶務担当副会長として、共に 3 年余和楽会の運営に汗を流してきました。

活動を通して地域のこと等について話す機会も増えたのですが、「慶之助記念館」の事は私の頭の隅にありましたが、話題にすることもなく過ぎてきました。

突然、松代町在住の友達から電話があり「ミヤイリガイを発見したその業績を展示してある『宮入慶之助記念館』がお前の所にあるそうだが案内してくれないか」と頼まれました。源太郎さんに連絡し、友達と「慶之助記念館」を見学しました。その素晴らしい研究成果と業績に只々感銘するばかりでした。改めてその偉大な功績を目の当たりにし、私は自分の浅はかさに身のすくむ思いでした。

▲記念館総会後の懇親会にて（2014 年 6 月）

源太郎さんを、和楽会の運営を通してその人となりを知るにつけ、「慶之助博士の功績を地元にもっと知って貰い、広めることが必要ではないだろうか」という話をした中で、酒井さん「功績を強調するあまり色々な話を付け加え誇張してしまうことがないように心掛けています。地道な活動を通して広めて行きたい。」と物静かに話してくれた姿から、源太郎さんの人柄や人間性、誠実さを感じました。いつも真摯な態度で、誠心誠意物事に取り組まれていました。

和楽会の重鎮として、今後も活躍を期待されていた矢先、余りにも突然の訃報に愕然としました。和楽会運営について、議論しあいながら進めてきたことが、走馬灯のように頭の中を駆け巡り、貴重な方を失った遣る瀬ない気持ちで胸が一杯です。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。源太郎さん安らかにお眠り下さい。

宮入慶之助記念館、館長宮入源太郎様を偲んで

神山　栄治

私が宮入慶之助先生の日本住血吸虫病や中間宿主宮入貝発見の偉業について知り得たのは、次男が小学校の社会見学で地元の宮入記念館に見学に行った時の資料からでした。長野市篠ノ井西寺尾の住人として、館長宮入源太郎様から「宮入記念館だより」をいただいて、記念館の様子、活動を拝見していたところ、平成 19 年夏頃、館長から「当館を社会的な存在として社会に貢献できるようにするため、特定非営利活動法人（NPO）を設立したいので協力してほしい。」と声かけをいただいた。お父様の宮入耕一郎様との縁もあり、何かお手伝いできることがあればと、以後、幾つかのイベントに参加させていただきました。

時々、記念館近くの『おぎのや』店舗の片隅で、コーヒーをいただきながら、館長より「こんな企画を考えているがどう思いますか、何でもいいから感じたことを話してほしい。」と言われ、記念館の看板のこと、NPO 法人の書類のことなど、素人ながら私の気づいた些細な提案について、いつも丁寧にメモを取られていました。館長はとても紳士的で、熱心に取り組む姿勢の持ち主だと強く感銘しました。

▲NPO 法人設立総会（2007 年 10 月）

宮入記念館にひっそりと置かれた顕微鏡や貴重な資料を見ていると、先生が日本住血吸虫病の研究に尽力された功績の証として、「後世に残して伝えていかなければいけない」と、館長が常々語られたことを思い出されます。

▲NPO 法人設立総会にて（2007 年 10 月）

館長が NPO 法人を設立し、賛助会員の年会費や寄付の他に私財を投じてきた記念館の運営は、自治体からの支援を受け入れずに厳しいものがあります。今後、館長の構想（想い）の一つの資料保存事業について、私も寄与貢献できればと考えています。館長が生前に提案された「地元会員の皆さんと地方病流行終息宣言した甲府盆地（昭和町）への取材」を実現し、記念館の今後の在り方を検討してみたらどうかと思います。

宮入源太郎君との清遊

松林　壮郎

宮入君とは長野北高（現長野高校）の同期ですが、高校時代も大学を経て社会人になってからも、同期会で見掛けるだけの、顔は知っている程度の関係でした。それが中年を過ぎてから、勤める会社が同系列ということもあって、何かの話から急に親しくなり、無二の親友として、３０年近いお付き合いをさせてもらいました。

私が考えついた「ノスタルジーは心のビタミン」というフレーズに彼が共鳴してくれて、昔お互いが少年だった時代に、それと知らずにすれ違った可能性のある土地を、ノスタルジー・ウォークと称して、一日歩き回ったりしました。その際には、西寺尾のお宅に泊めてもらって、一晩おおいに語り合いました。

私の父・松林勝の絵画「小諸風景」が、東京国立近代美術館の収蔵となったのを機に、宮入慶之助記念館に「郷土出身の篤志の画家・松林勝」なるパネルを展示してくれて、来館者が自由に持ちかえるよう「小諸風景」の絵葉書を沢山置いてくれました。市内・若里の長野県医師会にある松林勝の代表作の一つである「教室にて」を一緒に見に行ったのも、大切な思い出の一つとして心に残っております。

そんな縁で絵画の展覧会にも度々ご一緒しました。“清遊”と称して展覧会をみてから、どこかで一杯やって食事をするのを、お互いとても楽しみにしていました。最後は2016年5月で、六本木の国立新美術館でルノワール展を見て、新宿で食事をしました。彼はその前年に脚を骨折して、杖をついておられましたが元気でした。それが彼との清遊の最後になるとは思いもしませんでした。

▲西寺尾別宅の庭にて（2007年4月）

宮入慶之助記念館の運営については、地元にもっと知ってもらうべきと提言しましたが、小生は東京にいて、行動として参加して上げられなかったことを申し訳なく思っています。長野市の小中学生・高校生が医学の国際的偉人というと、野口英世となってしまい、足もとの長野出身の宮入慶之助に全く目が向かないのは、信濃教育会を元にいただく長野の教育現場としてはおかしい。宮入君に教育界への働き掛けを進言しましたが、私自身は何も行動をおこしてなく、忸怩たるものがあります。

先年のノーベル賞、山梨大・大村智さんの薬が、アフリカの何十万の人の命を救ったと言われましたが、日本住血吸虫症が幸いにも日本から消えてから半世紀を過ぎて、ミヤイリガイの発見が何十万の人の命を救ったことは日本では忘れ去られています。授与式も賞金もなくていいので、故人に対するノーベル賞というのがあって、宮入慶之助が入ったらいいな、というのが小生の夢想です。

宮入君は鉄道マニアでもあって、遺された蔵書の中に『電車の運転』『廃線紀行』などがあれば、それらは小生との話から所蔵されたものと思います。

東京・長野の二重生活に九州出張など、よく耐えられました。ゆっくり休んで下さい。

宮入さんの思い出

秋山　文夫

私と宮入さんが出会ったのは1969年です。当時宮入さんは国際電気に勤務されており設計技師でした、宮入さんが私の勤務していた日立製作所―神奈川工場に研修で来られた時の事です。この時は仕事の関係は有りませんでしたが私と同じ部署でしたので職場対抗バレーボール大会に出場してもらうなど体育活動を通して親しくなりました。

宮入さんが国際電気に戻られた後、私の部署から宮入さんの部署にネットワーク機器の開発を依頼する事になり、以後仕事を通じて付き合う様になりました。

私は宮入さんより年齢が9歳下でしたが宮入さんの誠実かつ謙虚な人柄に惹かれ国際電気を退職されてからもお付き合いをさせて頂きました。

宮入さんを含む国際電気OBの方々と日立OBの人達との会食時に、宮入さんの近況報告で、宮入慶之助記念館の館長をしていて東京と長野を行き来していると聞き、皆で宮入記念館に行こうという事になり、2009年4月11日に記念館を訪問しました。

私には初めての長野行、そして久しぶりに宮入さんに会えると云う事でワクワクして出かけまし

た。当日の天気は肌寒かったものの快晴で長野の空は私たちを歓迎しているかのようでした。

記念館では記念館設立の経緯や宮入慶之助の偉業を聞き感銘を受け、また善光寺（御開帳の年でした）、川中島等々を案内して頂きました。夜は宮入さんも一緒に松代温泉に泊まり、昔話を肴に飲み、遅くまで談笑しました。私にとって記憶に残る長野行になりました。

▲記念館前にて（2009 年 4 月）

宮入さんには公私ともにお世話になりました、仕事や人間関係の事で相談した時にはいつも優しい笑顔で接して頂き助けてもらいました、今でも感謝しています。会社生活を卒業したのでもう一度長野に行き宮入さんと久しぶりにお会いし語り合いたいと思っていたところ突然の訃報を聞き残念でなりません、また機会を作り長野に行きたいと思っています。

宮入源太郎氏　正義感の塊

藤井　拓三

故宮入兄との初対面は、昭和 30 年代初期、旧国際電気狛江工場労働組合青年部の職場代表の会合でした。私より数年後輩で、氏にとっては入社直後で初参加ながら、「労組の正しい発展は会社の発展に資するものであり、もっと堂々と誇りを持って会社側と話し合おうではないか。特に将来を担う青年部は」との発言。そのような見解を述べる者は初めてで、目を見晴らされました。65 年程過ぎた今も「立派な青年が入社した」と鮮明に覚えています。

1990 年代初期、電子情報通信学会の依頼で私が「携帯電話の開発における日本の国際市場での孤立」と題して講演し、「国際協力、国際標準化の重要性を無視した事が主因で、国に正しく適切な方針がない事が原因である」と終えた時、後部席から真っ先に手を挙げたのが、何と参加の予想もしなかった宮入兄でした。「学会は、技術を追いかけるだけでなく、国際市場で日本が感謝され支持されるよう国を指導する必要がある」と最も大事な点を指摘されました。以来 25 年程経過しましたが、日本は国際標準化の重要性についての理解はしながら、海外戦略は全く持たず、孤立は益々深まっています。宮入兄の様な方が学会の指導部におれば事態は変わっていたに違いません。

宮入兄の正義感は、兄の母校、電通大の幹部教授連にも知れ渡り、お蔭で私も数人の方と情報の授受を行わせて頂いています。

宮入兄、天国でも貴兄は正義感に満ち人々を導いているに違いありません。将に仏様です。お会いする日を楽しみにしています。

宮入館長の熱い思い

川野　和樹

宮入源太郎館長へのお礼と追悼の気持ちを込めて誠に僭越ながら思い出を書かせて頂きます。

私と宮入館長との出会いは、一昨年まで記念館監事であった私の叔父(川野登)との繋がりからです。8 年前の平成 22 年に叔父の依頼で、宮入館長、当時の渋川監事、叔父の三人を筑後川流域にある慶之助先生ゆかりの地へお連れしたのが最初でした。その時は、私自身まだ慶之助先生や住血吸虫病のことは詳しく存じませんでしたが、館長の「宿主が撲滅されたが病気が滅んだ訳ではない。海外では今でも発症している怖い病気です。そのことを伝えたい」とのお話に宮入館長の熱い思い

を感じたことを覚えています。後日、久留米出身の何人かの知人に尋ねると「ちっご（久留米の俗称）の人は、子供の頃は川で泳ぐなと言われていた」と皆答えていました。久留米では住血吸虫病が遠い過去の病気でなく、近現代まで身近な危険の一つだったことに驚きました。あらためて館長のお話に納得した次第です。

▲九大の「日本住血吸虫中間宿主百周年記念展」会場にて
（2013年11月）

そのご縁と私自身の仕事上の経験もあって、平成25年国立科学博物館での企画展、九大医学図書館での百周年記念展と微力ながらお手伝いさせて頂きました。また慶之助先生の退官後のお住まいが、私の自宅近くにあったことを知り、場所の特定を試みたりもしました。何より私ども夫婦が記念館へ訪問した際は長野市内の歴史名所をご案内下さったり、ご自身のコレクションのことも熱く語っておられた館長のお姿を、最近のことのように思い出されます。真に伝わるというのは人の熱意が何より大切なことをその時実感しました。記念館活動により多くの人達に慶之助先生の偉業と住血吸虫病のことが広まっていった力の源は、私が感じた館長のあの熱い思いにあったと確信しています。宮入館長のその思いとご遺志はこれからも決して忘れることはありません。

晩年宮入館長は九州大学正門横に新しく開設された「九州大学医学歴史館」への訪館も楽しみにされていました。最初の企画展が慶之助先生にも焦点をあてた「黎明期の偉人伝」ということで特に切望されていただけに残念でなりません。

宮入館長、誠にありがとうございました。本当にお疲れさまでしたと申し上げ、追悼の辞とさせていただきます。謹んでご冥福をお祈りいたします。

宮入さん有難う

丹羽　保明

宮入さんとは大学時代バレーボール部で共に汗を流し、以来長いお付き合いをさせて頂きました。

後年、定年が近づいた頃バレー部草創期のメンバー10名ほどで毎年集まるようになり、何時だったか、彼から、宮入記念館のことを聞き驚くと共に私などにはとても想像もつかない大きな事業を計画している彼が羨ましく思えたものでした。

その後メンバーの何人かで記念館を訪れ宮入慶之助の輝かしい業績、ミヤイリ貝のことを初めて知ることになりました。当時父上の耕一郎様もご健在で記念館の立ち上げ、運営について語られたお二人の熱い思いが今も脳裏に残っています。

私の知る限り、彼は館長の傍ら、長野市立博物館の友の会副会長や、母校ミュージアムの学術調査員を長く勤められその功績に学長より感謝状が贈呈される等幅広いご活躍に頭が下がるばかりでした。

一方私は定年を機に、夢であった模型SLの製作を始めました。彼はこの手作りSLと、慶之助の時代は実験道具など手作りであったことを重ね、このSLを展示することで来館者に「当時の手

作り精神」を紹介したいと考えたようです。後に彼の要望で名誉なことですが１号機を記念館に展示させて頂きました。又私の所属する日本庭園鉄道（裾野市）のコースで彼と運転や走行を楽しむことも出来ました。

更に彼の発案と、尽力で、母校の学園祭で２号機を走らせる事が実現しました。このイベントは大変好評で翌年に長野市立博物館、さらにその翌年に再び母校学園祭と続きました。

大勢の方に乗車し喜んで頂いたことは無常の喜びでした。特に年令とともに若者との縁が薄くなった私にとって、卒業後半世紀以上もたった母校のキャンパスで若い学生さん達や大学の関係者との交流はとても新鮮で、胸躍る夢のようなひと時でした。

長野市立博物館では、終日乗車希望のお客さんの行列が絶えることなく続き、故障無く無事走るかと心配する彼の顔が今も思い出されます。

▲電通大調布祭にて（2010 年 11 月）

宮入さん私の趣味の SL 作りに一味違った喜びや感動を与えてくれて有難う。今は３号機も完成しましたが、宮入さんと共に乗れないのが残念に思いながら、裾野のコースで運行を楽しんでいます。

編　集　後　記

○追悼号編集に当たり、写真を大きく載せることに留意して編集しました。その結果 14 ページとなった本号を墓前に捧げたいと思います。

○本追悼号編集にあたり、多くの会員の皆様にお忙しい中ご寄稿いただき感謝申し上げます。これも一重に前館長の人徳の賜物と感じております。

○今回の追悼号編集に当たり、写真を提供していただいた会員の方々のお名前を記してご協力に感謝申し上げます。

〈秋山文夫・川野和樹・神山栄治・小島夫美子・多田功・長澤保・丹羽保明・松林壮郎・宮入聰一郎〉

○6 月の通常総会でこれまで長年にわたり理事及び名誉館長をつとめていただいた多田功先生が退任し、名誉館長を太田伸生先生がつとめていただくことになりました。多田先生には記念館だより「巻頭言」の毎号執筆などご尽力を賜り感謝申し上げます。

○現在、記念館のホームページのリニューアル作業を進めております。8 月中には新たなホームページの運用を開始する予定です。

○記念館のメールアドレスを新しく設定しましたので、利用することができます。

宮入慶之助記念館だより　第 26 号
発行者　特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
編集者　山口　明
〒388-8018　長野市篠ノ井西寺尾 2322
Tel＆Fax　026（293）4028
メールアドレス
miyairikinenkan1999@gmail.com
発行日　2018 年（平成 30 年）8 月 8 日